

II-1-5 英語科

(1) 研究仮説

ア 研究の背景

本年度から新教育課程が本格実施となった。新課程の改定のポイントである3つの柱を踏まえ、英語科では、「話すこと（やり取り）」が新たに加わり、4技能5領域のバランスのとれた育成が本科の目標として示されたが、これは中教審の答申等でも明言されてきた、「生きる力の理念の具体化」の一つであり、ひいては「日本人の発信力向上」がねらいであると考えられる。そのためには生徒の英語の思考力や表現力を磨くことが求められ、特に **output** 能力の向上は急務である。本校においても授業改善を通じてこれらの能力育成が図られる必要があると考えた。

イ 研究仮説

目標である「発信力」向上のためには、新学習指導要領にある、生徒の思考力や表現力をさらに磨いていくことが重要である。この点を踏まえ、次のように仮説を立てた。

・授業で英語を使用する具体的な場面を設定し、

- ① 説明や他生徒とのやり取りの時間を確保することで、英語で思考する力が養われるであろう。
- ② 他生徒が表現したものに触れることで、それらを自身の表現力に還元することができるであろう。

(2) 実践

ア 実施日時：通年

イ 実施場所：各教室

ウ 参加生徒：1年 C、D 組生徒 計80名

エ 実施内容：

1. 英語による言語活動の時間の確保

大部分を教科書内容の理解に費やしていた授業の時間配分を見直し、生徒の英語使用時間に多くを割けるようにした。

教科書内容に共通する話題の言語活動を設定することで、単元の流れを損なわず、教科書で学んだ内容や情報を言語活動に生かせるようにした。

活動の際に、生徒がより具体的にゴールのイメージがしやすいよう、生徒が意識すべき目標を毎時間の授業開始時に提示した。

2. Google スライドを使用した、英作文等の課題の提出

授業内容に準拠した英作文等の課題提出に Google スライドを使用した。

提出後、生徒は他生徒の意見や表現を自由に確認することができる。

3. 授業や単元の振り返りに Google Form を使用

各時の目標や達成度を毎時間確認するために、Google Form を使用し、自身が成長できた部分や、よりよい英語話者となるために改善すべき点を生徒自身に考えさせた。

(3) 評価

ア アンケート結果（抜粋）

対象生徒に実施したアンケートの結果は下記のとおりである。

I この授業を通して、自分の考えを広げ、深めることができた。

よく当てはまる	37.0%
やや当てはまる	57.5%
あまり当てはまらない	4.1%
まったく当てはまらない	1.4%

Ⅱ この授業を通して、自分の考えを相手に伝えることができた。

よく当てはまる	7.2%
やや当てはまる	66.7%
あまり当てはまらない	21.7%
まったく当てはまらない	4.4%

Ⅲ この授業を通して、自身の考えをうまく表現することができた。

よく当てはまる	26.5%
やや当てはまる	55.9%
あまり当てはまらない	16.2%
まったく当てはまらない	1.5%

イ 「表現力」の学習に関する参加生徒の感想（一部抜粋）

- ・ 強調するとき“as soon as possible”は使えると思った。
- ・ 重要な単語を発音するとき、わざとスピードを落とす。
- ・ 比較級を使うことは自分の主張を強調したいときに役立つ。
- ・ 問題などを説明するとき **that** や **~ing** などの構文を使うと文章がうまくまとまったので、今後もテストなどで使えると思いました。
- ・ 「それらを踏まえて」という表現を今まで知らなかったので、自分の意見を述べる時に使えそうだったと思った。
- ・ 私にはできることがいくつかあります。一つ目はこれです。二つ目はこれです。のような表現は使いやすく分かりやすいので今後も使えると感じた。
- ・ “abandon” “wander around”というそれぞれ「放棄する、捨てる」「歩き回る」という意味の単語を覚えた。「abandon」はペットを捨てる、“wander around”は遊園地を歩き回るなどといった状況で使えると感じた。

ウ 考察

上記アンケートより、授業を通しての思考力、表現力は年度当初よりも向上していると感じている生徒の割合は高いと言えるが、一方で各質問に対し「まったく当てはまらない」と回答した生徒も複数名いる。Google Form による解答の提出と集約は生徒が他の解答も確認することができるという点で、自身の表現力向上において一定の効果を上げていると思われる。「表現力」に関する具体的な記述からは、表現そのものの習得に関する記述以外にも、英語を表現する際の考え方や思考の仕方に言及するものもあり、自身の学習に深く向き合う生徒の姿も見ることができる。

エ 今後の課題

今回の試みでは生徒は自身の能力を向上させることができた実感した一方で、それを客観的に評価するために、模試や試験等で検証するには至っていない。また、自身の考えや表現をまったく表現できなかったと回答した生徒についても、原因を究明し、自身の思考力、表現力の伸長を感じることができるよう、細やかな指導も必要となってくるだろう。今後は、そのような生徒への対応も視野に入れ、指導を継続するとともに、思考力や表現力に関する模試での結果等も検証し、「発信力」のある生徒育成に向け、各能力のさらなる向上を目指したい。

(4)参考文献

- ・ 中央教育審議会答申(2018) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」